

# 書評

宮下忠雄博士著

## 中国幣制の特殊研究

——近代中国銀兩制度の研究——

一

近世開始期アメリカ新大陸の発見以降メキシコ、ペルー等の諸鉱山から採掘された金銀のヨーロッパ諸国への流入により、それ等諸国の物価賃金の高騰をもたらしいわゆる価格革命の成立をみた。さらに、東インド貿易に際しては重商主義時代ヨーロッパ諸国側の恒常的入超尻決済と東洋方面での金銀比価における銀高により専ら銀のインド、中国方面への流出をみ、遂にはこれ等両国をして銀を貨幣として重用するにいたらしめた。

中国幣制の特殊研究

その後、一八九三年のインドの金為替本位の採用、本世紀に入つて一九三四年のアメリカの銀価吊上政策と一九三五年の中国の幣制改革による現銀取引の禁止に伴い、東洋方面に蓄積された銀は故郷のアメリカ大陸へ還流し、重商主義時代から自由主義時代に跨つて東西経済融合の機能を果しながら銀の世界一周の旅の完結をみた。

如上の銀の世界一周過程において、最も支配的かつ長期的に貨幣的機能を果したのは中国においてであつた。十八世紀代から今世紀の自由主義時代末期にいたるまでの中国経済の理解は銀を離れては不可能であるといつて差支えない。今、五国通商以後の中国におけるその特殊な複雑をきわめ神秘的にさえ映ずる銀兩制度について、神戸大学教授宮下忠雄経済学博士の「中国幣制の特殊研究」と題する近代中国銀兩制度の研究の刊行をみたことは、暗黒裡に閉ざされていた一面に燈火を点ぜられたに均しいものがある。宮下博士には先に「中国貨幣制度論」(昭和十三年刊行)、「中国銀行制度論」(昭和十六年刊行)の二大著があり、中国の金融問題に造詣深い著者をえて始めて銀兩研究の完成をみたことは至当のことといわねばならない。銀兩とは俗に馬蹄銀＝Sycee Silver と呼称されるものであり、今日ではその制度は消滅し、実物も絶滅に近い状態にあるが、それにもかかわらず、宮下博士の銀兩制度の研究の価値ある所以はそれが社会経済史的背景

## 中国幣制の特殊研究

において取扱われ、なお今日の中国社会経済の現実と特殊性理解のために資するところが少くないからである。以下、本書の内容についてその輪廓を明らかにし、真摯な本研究を江湖に紹介する所以である。

## 二

本書は五口通商（一八四二年）以後の中国近代化過程における銀兩制度の研究であつて、全十五章から成立する。

第一章および第二章では近代中国銀兩制度の本質形態、ならびにその社会経済的性格の分析が試みられる。ここでは既往の銀兩の定義についての兩建（重量と品位）秤量銀地金貨幣説や、銀秤量用兩建貨幣的計算單位説の何れもは盾の一面のみをみるものとして斥け、著者は近代中国の銀兩を以つて秤量貨幣たる銀地金のみならず、兩を基準とする貨幣單位をも銀兩として取扱う。従つて、銀兩制度は形態的に固有の銀兩制度と派生的銀兩制度に區別される。固有の銀兩制度は古くから中国で行われてきた銀地金の秤量制度で、これを銀錠秤量銀兩制度といい、この制度は（一）銀錠、（二）銀錠秤量銀兩單位、（三）秤量の手続という三つのモメントより成立つとする。しかるに、近代中国に入つてからは、銀貨の流通増大を主たる原因として右の三つのモメント、あるいはそれらの相互關係の変化に基づき種々の形態の銀兩制度が生成し、それらの

銀兩制度を以つて派生的銀兩制度とし、次のごときものが列挙される。

- 一、銀錠秤量銀量單位銀錠價值換算制度
- 二、銀錠秤量銀量單位銀貨秤量制度
- 三、銀錠秤量銀量單位銀貨價值換算制度
- 四、銀貨秤量銀兩單位銀貨秤量制度
- 五、銀貨秤量銀兩單位銀貨價值換算制度
- 六、銀兩鑄貨制度

右のほか、固有の銀兩制度に関連して紙幣・手形・預金振替・為替送金・帳簿信用等の銀兩信用制度がある。近代中国の銀兩制度はおよそ如上のごとき諸形態をとり、一地の銀兩制度についてみれば若干の形態の銀兩制度の複合体であることを通常としていた。銀兩制度を複雑怪奇ならしめた所以である。

第二章の「清朝の幣制と銀兩制度」では宋代以降の中国の幣制について国幣制度と民幣制度との対立乃至は併存抗争のあつたことを指摘する。清代の国幣制度は制錢（銅貨）と銀錠であり、国庫の収支に用いた銀錠としては庫平により秤量される庫平銀のみを認め、それ以外の民用の銀錠については自由放任され、各種形式の大小の銀錠が各相連する單位と平（ハカリ）を以て秤量され流通弘布するところとなつた。民幣には如上の銀錠のほか銅錢、輸入銀貨、私票があつた。

これ等の民幣の幣制権は商人ギルドの掌中にあつて、「中国の民幣制度のもとにおいては支払協同体は幣制を創造しうる。」

として著者は中国における民幣制度の存立基礎を確認する。まさに、このことは鑄貨と度量衡の規制が常に最高の政治的権力に帰属していた西洋とは対蹠的な特徴といわねばならない。ついで、中国で銀貨の鑄造が永く行われることなくして銀兩制度の成立をみるにいたらしめた基礎条件として、(一)銅銭の民衆生活における不可欠性に対し、銀錠流通性における特殊性(大取引、大価格の支払)、(二)民衆の金屬主義的および秤量主義的貨幣觀念、(三)金屬貨幣鑄造技術の幼稚性、(四)中國經濟の前資本主義性、(五)ギルドによる幣制支配權の掌握の諸特徴をあげる。しかも、かかる著者の立論の根拠には既往の銀兩の鑄貨説(京大、穗積文雄教授)(本書一四四—七頁)、中國幣制における名目主義性説(一橋大、村松裕次教授)(本書一九—二〇頁、一四四頁、五〇八—五二二頁)に周到嚴密な本書の研究結果に裏づけられながら反駁していることが注目される。中國人の貨幣思想が金屬主義であるか名目主義であるかについては過去幾多の論争をへてきただけに興味深いものがある。

第二節では如上の清代原有の銀兩制度が中國國幣制度の近代化に際し、前資本主義的半植民地的諸勢力の残存により改革の徹底化をみるにいたらなかったことが明らかにされる。

## 中國幣制の特殊研究

### 三

第三章から第十三章までは近代中国における銀兩制度の實體が取り扱われる。そのうち第三章は第四章以下の各論に対する総論の意味をもち、最後の節では銀錠にはこれに代替性をもたらしめる觀念がなかつたから未だ鑄貨とみるべきではなく、さりとて單純な秤量貨幣でないことも明白であつて、銀錠秤量銀兩制度の合理化の一形態として、むしろ半定型的銀地金貨幣と呼ぶのを至当とし、貨幣性の程度の比較的高い物品貨幣とみるべきであると主張されている。すなわち、既往の銀兩鑄貨説に反駁している。著者は年來中國民衆には金屬主義的貨幣觀念が支配するとの主張者であつて、銀兩制度との實質的価値關係が立ちきれ、單純に名目主義化する場合その価値維持は困難となり不換紙幣化して没落するにいたることを明らかにし、(本書一九—二〇頁、一四四頁、五一—一頁)現在の中共政權においても、金屬主義や秤量主義よりもさらに徹底した物財主義を以つて貨幣価値維持に努めていることを指摘する。中國の社会では貨幣の信認を支えるものは國家よりも物財であり、金屬であり、然らずとすればギルドであつたと独自の立場を披瀝する。

ついで、第四章から第九章までは滿洲、華北、華東、華中華南、辺境にまでおよぶ中国全土にわたる銀錠秤量銀兩制度

## 中国幣制の特殊研究

の各地方別の詳細な実態調査の記録である。

第十章は銀錠の代りに銀貨を授受する制度についての研究である。ここでは小竹文夫教授の足色銀両（紋銀）の国外流出否定説を反駁し、悪貨の洋銭にも打歩のつく事実のあることが指摘されている。

第十一章の関平銀制度では海関を中心として使用された官定銀両の関平銀について検討し、関平銀が全海関を通じて画一的統一的に等しい価値を有する計算単位のごとく解する通説の誤謬であることが明らかにされている。

第十二章では銀錠を離れた銀両鑄貨（銀貨）についての歴史的解明を試みられ、本章で金屬貨幣としての銀両制度の分析が打ち切られる。

第十三章では関連的銀両制度として銀両信用制度のうちとくに中国の各地方に成立をみていた銀両振替制度、例へば上海の匯劃、天津の撥碼、營口の過炉銀等についての考察が試みられる。銀両振替制度はギルド的結合による人的信用関係の基礎の上に成立し、名目主義説のよつて立つ主要根拠でもあるが、振替えられる預金単位が銀錠秤量銀両単位との価値関連を絶ち不換紙幣化するとともに没落するにいたる実例が示されている。如上の傾向からしてもギルド的結合による信用制度にも一定の限界があり、究極するところは財産関係による物的保証が潜在的に大きな効果を有していたことを教え

られる。

## 四

第十四章以下では民国以降における近代中国銀両制度の崩壊過程が考察される。第十四章は北京政府時代を取扱い廃両の促進的阻止的要因を概観する。民国三年の国幣条例による袁像銀元の出現を以つて、廃両の重要な一モーメントとするが、廃両改元が遂に北京政府時代に達成されなかつた根本的理由を「銀元ブロック」ともいふべき新興の上海民族主義銀行資本の勢力がなお「銀両ブロック」の外国銀本資本ならびに錢莊資本に決定的に優越する段階にまで到達していなかつたことに求められている。

最後の第十五章では国民政府時代の廢兩改元の経過が展開される。すなわち、国民政府と浙江財閥の頂点にたつ上海民族銀行資本との合作のもとに展開される廢兩改元を国幣制度、民幣制度それぞれ個別的に進展する過程から、一九三三年四月六日全国の廢兩の断行をみるにいたる経過が詳細に考察される。全国の廢兩を促進した要因は銀兩ブロック（前資本主義的錢莊資本と半植民地的外国資本）の衰退に併行する銀元ブロック（資本主義的中国銀行資本）の政治的経済的優越化にあるが、その主要な契機としては、一、中央造幣廠の開工進展、二、銀価の下落と各国の金本位制の離脱、三、一九

三二年前半期の洋厘（銀元一元の上海規元兩に対する相場）の大暴落があげられている。

末尾の第四節では全国的銀兩改元の結果と意義を論ずる。その結果の主なるものは次の通りである。

(一) 中国幣制の統一

- (a) 国家の幣制を通ずる中国経済社会に対する統制力の確保
- (b) 上海民族銀行資本の勢力伸長と前資本主義的上海銭莊資本の衰頹

(c) 外銀銀行の地位の没落と中央銀行の外国為替市場における勢力の向上

(d) 以上の総合的結果としての中国経済の国民経済的發展、

ならびに中国國家の近代化の達成

さらに、二年後一九三五年の國民政府の幣制改革はこれに先行した全国的廢兩改元を経て始めて可能であつた所以をとり、そこに全国的廢兩の世界史的意義を著者は認める。一九三五年の幣制改革の強行とともに、それまでは舊舊色にみえた上海民族銀行資本の前途は暗転して中央、中国、交通、中國農民の四銀行を中心とする國家銀行資本に従属せしめられていつた。一九三五年以降は銀元ブロックに属していた上海銀行民族資本は逆に銀兩ブロックの上海錢業資本と提携して國民政府、ならびに日本側の強權的貨幣金融政策に対抗していつた。幣制における民間生活の保全手段——銀兩制度のこ

中国幣制の特殊研究

とき——はギルドから失われ、もはや民衆の手には帰らなくなつていたが、「民」は袖手して「官」の貨幣政策の濫用に自らの経済と生活を委ねることなく、著者の「中国銀行制度論」等にも展開される有力な対抗措置にでた。とくに、幣制金融における官僚軍閥のデスポティズムへの不信にみられる民間ギルドの勢力と意義を著者は高く評価している。右のごとき傾向は公式主義的中国研究者に見出されない態度といわなければならない。克明な民衆生活の実態研究の労苦をへない公式主義論者は民衆生活の後進的社会経済構造に対し、性急に否定的な断定を下しがちであるが、かかる後進的構造への停滞を余儀なくせしめた上層の官僚デスポティズムへの鋭い批判を向けると、民衆生活への同情的理解によつて公式主義的見解の誤謬が是正されゆくものといわなければならない。

銀兩制度を長く存続せしめた中国の社会経済的諸条件は革命情勢下に一變に覆滅しされゆくべきものではなく、むしろ今日の中共革命においても、適確な事実の把握は困難であるが、中国の現実に対応する方式を採用することを余儀なくされているのではなからうか。銀兩制度それ自体は消滅をみて、その背景の社会経済的分析を試みた本書のもつ価値は今日の革命情勢下にあつてなお大きいものがあるといえよう。

流転変説の目まぐるしい日本学界における中国研究者層のうちにあつて時流に超然として浩瀚な本書を完成せしめた著者

デューセンベリー「所得、貯蓄及消費者行動の理論」

の重厚な学問的良心に敬服おく能わないものがある。匆忙のうち草した本紹介が内容の片鱗を伝えるに止まり、かつ文中伝えて誤りのないことを保しえない。予め著者の諒察をこゝ次第である。(A4版六八九頁、丸善株式会社発売、定価六五〇円)

(内田直作)